



TITLE:

幸島野外観察施設(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

河合, 雅雄; 森, 明雄

CITATION:

河合, 雅雄 ...[et al]. 幸島野外観察施設(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1975, 5: 19-19

ISSUE DATE:

1975-12-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162660>

RIGHT:

日本生化学会第47回大会(1974)

8) 血小板凝集に関する血漿タンパク質

西村義久・山田洋資・伊藤道雄
竹中 修・稲田祐二

日本生化学会第47回大会(1974)

9) *Pseudomonas glutaminase* のトリプシン分解

阿部 力・竹中 修・稲田祐二
日本生化学会第47回大会(1974)

10) ニホンザル新生児期における血液タンパク質の変動

竹 中 修

第19回プリマーテス研究会(1975)

幸島野外觀察施設

河合雅雄(兼)・森 明雄

幸島をめぐる観光開発や観光客の増大によるフィールド維持の困難さは持続している。この問題は基本的には国による管理体制を作ることが最も望ましい解決法であろう。なお、昭和49年から助手の定員がつき、森明男が赴任した。現地の職員は4人となった。

《群れの状況》

リーダーの地位、群れの社会構造は比較的安定している。ただし、ここ数年にわたる変化であるが、観光関係者による不定期無計画な餌の投与によって、オオトマリ浜に段留するサルが生じ、群れのまとまりは少しルーズになっている。

サルの健康状態については、寄生虫を大量に持っており、昨年にひきつづき、瘦せた個体が目立つ。また若い個体の発育の遅れは大変顕著である。49年度の出産数は22頭であり、内8頭が死亡した。49年度の出産数が多かった理由は、2つ考えられる。48年度の出産数が少なかったことと、48年夏死亡個体が続出したため、48年秋に大量の人工の餌を与えたためである。48年秋から49年春にかけて一時的に体重の増加が見られた。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的・社会学的研究

森 明雄・河合雅雄・三戸サツエ¹⁾
山口直嗣²⁾・冠地富士男²⁾

前年度からの継続で、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集している。月1回のサルの体重測定を行っている。前年度は、おとなの個体を中心であったが、今年度より若い団体に重点を置き、発達に関する資料をうるよう努めている。また、前文化的行動(イモ洗い、小麦洗い行動)に関する資料もとっている。また社会変

- 1) 教務補佐員
- 2) 文部技官

動の通年の記録をとっている。

2) 内部寄生虫に関する研究

堀井洋一郎³⁾・森 明雄

内部寄生虫卵の季節変化を、月1回個体各に採糞することにより、定量的に調べている。また駆虫を行なっている。

3) 特に大きなポピュレーション・サイズを持つ群れの統合

森 明 雄

高崎山A群(約1,000頭)、B群(約300頭)で、おとなのメスを個体識別し、おとなのメス間の順位関係を調べた。高崎山A群、B群ともに、優劣の不安定な個体関係が多数見られた。順位関係の不安定さの度合は、群れのポピュレーション・サイズに依存することを見出している。

4) 高崎山に生息するニホンザルのアカンボウ(0才)の死亡数と死亡要因の推定

森 明 雄

高崎山A群、B群の識別したおとなのメスのアカンボウ(148頭)の生死を毎月1回確認し、死亡時期を調べた。

なお49年度に、本施設を利用して研究を行なった所員は千葉敏郎、松林清明(サル施設)菅原和孝(大学院生)。本施設を利用した共同利用研究者は、黒田末寿(京大・理・動物)町田昌昭(国立科学博物館)・荒木潤(帝京大)である。昭和49年度に、本施設を訪問あるいは利用した研究者は延べ716人である。

論 文

- 1) 森 明雄(1974): 霊長類のコミュニケーション言語 3(11):

学 会 発 表

- 1) Intratrop spacing mechanism of the wild Japanese monkeys of the Koshima troop.

A. Mori.

5th Cong. Int. prim. Soc. (1974)

- 2) 特に大きなポピュレーション・サイズを持つ群れの統合

森 明 雄

第19回プリマーテス研究会(1975)

サル類保健飼育管理施設

千葉敏郎・松林清明
後藤俊二

昭和49年度における本施設の業務遂行上、最も困難を

- 3) 宮崎大学農学部家畜内科教室(大学院生)